

松浦川水系河川整備基本方針

土砂管理等に関する資料（案）

平成18年2月7日

国土交通省河川局

目 次

1 . 流域の概要	1
2 . 河床変動の状況	3
3 . 河口部の状況	11
4 . まとめ	12

1 . 流域の概要

松浦川は、その源を佐賀県杵島郡山内町青螺山（標高599m）に発し、鳥海川等の支川を合わせながら北流し、唐津市相知町で巖木川を合わせ、下流平野部に出て徳須恵川を合わせ、その後は唐津市中心市街部を貫流し、玄界灘に注ぐ、幹川流路延長47km、流域面積446km²の一級河川である。

その流域は、佐賀県北西部に位置し、唐津市をはじめ、伊万里市、武雄市、山内町の3市1町からなり、流域の土地利用は、山地等が約84%、水田や畑地等の農地が約15%、宅地等の市街地が約1%となっている。

流域内には流域内人口の約5割が集中する唐津市があり、沿川には、JR筑肥線、唐津線、国道202号、203号等の基幹交通施設に加え、西九州自動車道が整備中であり交通の要衝となるなど、この地域における社会・経済・文化の基盤を成すとともに、松浦川の豊かな自然環境に恵まれていることから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

松浦川流域は、脊振山地や丘陵地に囲まれ、河口部が虹の松原を有する玄海国立公園に指定されているほか、黒髪山県立自然公園等がある。松浦川及び徳須恵川は標高が約400～500mの山地を源流としており、河床勾配は、約1/500～1/10,000であり比較的緩勾配である。一方、巖木川は、作礼山（標高887m）、八幡岳（標高764m）と比較的高い山地を抱えており、河床勾配は約1/50～1/500と急勾配になっている。

流域の地質は、本川上流域の大部分が古第三紀層に属しており、本川下流部の山地及び巖木川流域は主として花崗岩よりなり、本川下流の平野部は沖積層からなる。流域は日本海型気候に属し、特に玄海灘の対馬海流により湿潤な空気がもたらされるため、平均年間降水量は約2,100mmと多く、降水量の大部分は梅雨期と台風期に集中している。

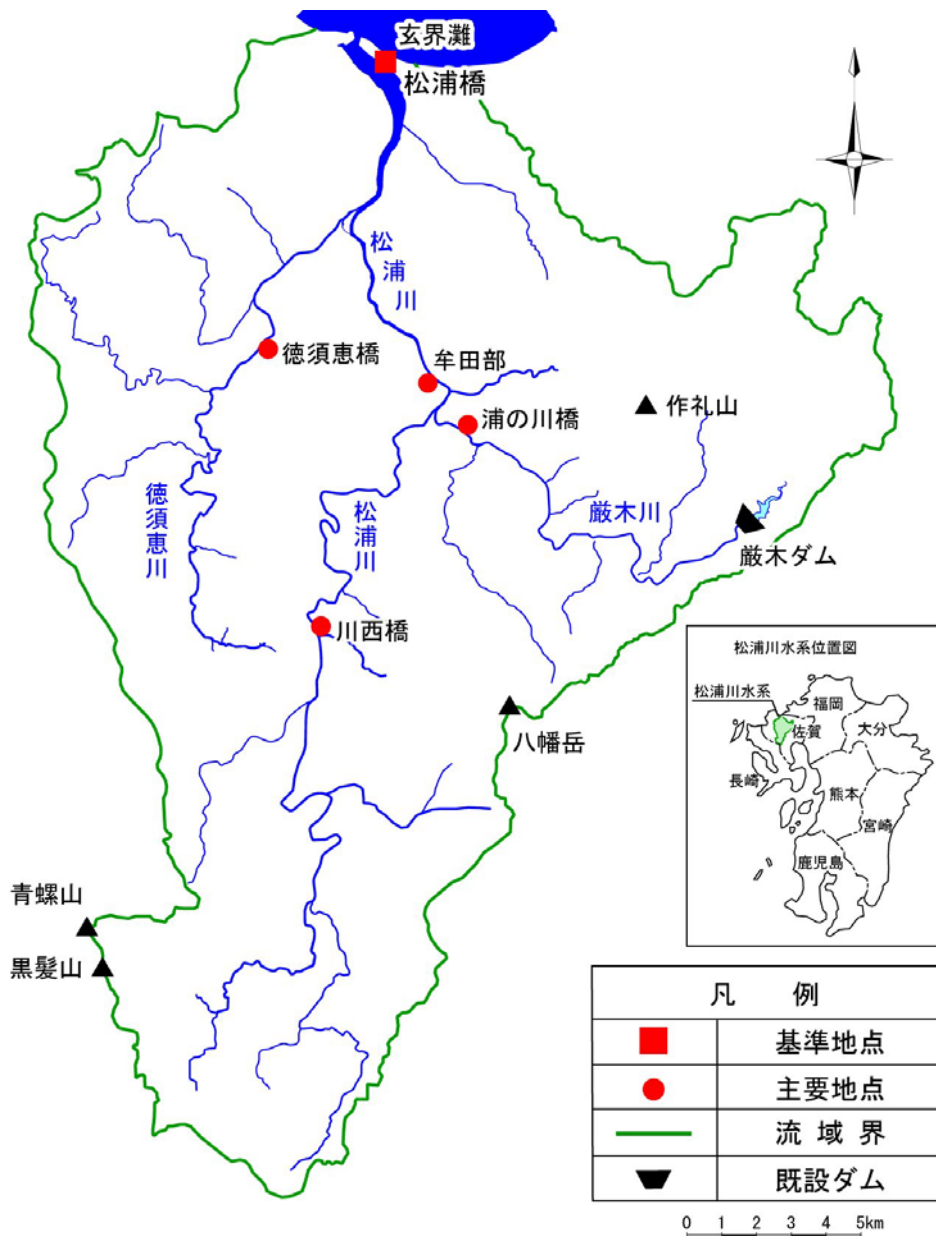


図 1 - 1 松浦川流域図

表 1 - 1 松浦川流域の概要

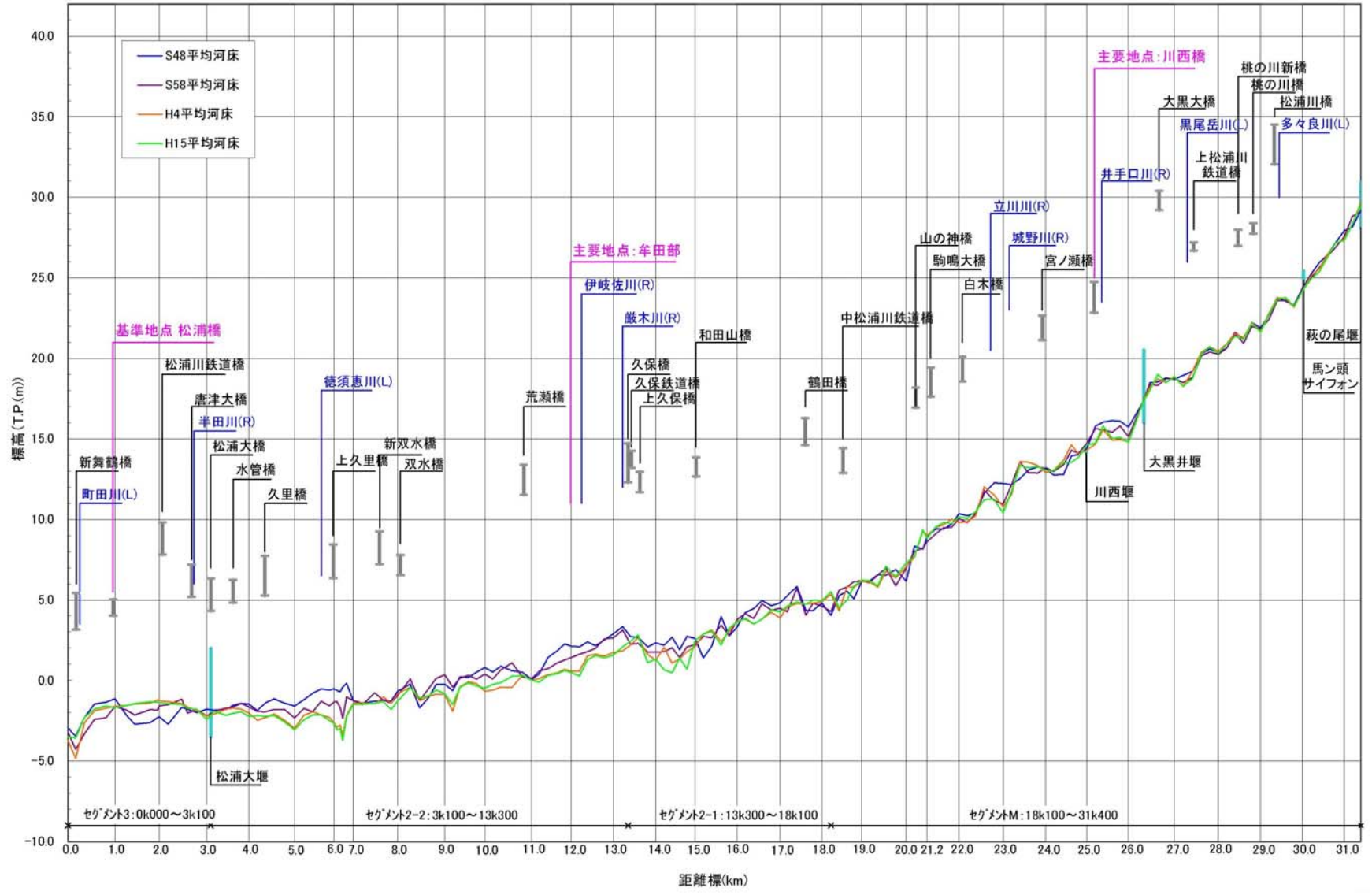
項目	諸元	備考
流路延長	47km	全国 95 位
流域面積	446km ²	全国 95 位
流域内市町村	3 市 1 町	唐津市、伊万里市、武雄市、山内町
流域内人口	約 10 万人	
支川数	80	

2 . 河床変動の状況

2 - 1 河床高の縦断変化

昭和 48 年～平成 4 年の間における低水路の平均河床高は、下流部を中心に低下が見られる。これは、昭和 51 年、昭和 57 年、平成 2 年洪水等の規模の大きい洪水の影響によるものと考えられる。一方、近年の約 10 年間（平成 4 年～平成 15 年）における低水路の平均河床高は、河道の掘削工事等に伴う低下が見られるものの、経年的に上昇、低下といった顕著な変動傾向は見られない。支川の徳須恵川、巖木川についても、本川同様に、経年的に上昇、低下といった顕著な変動傾向は見られない。

図 2 - 1 松浦川平均河床高縦断面図



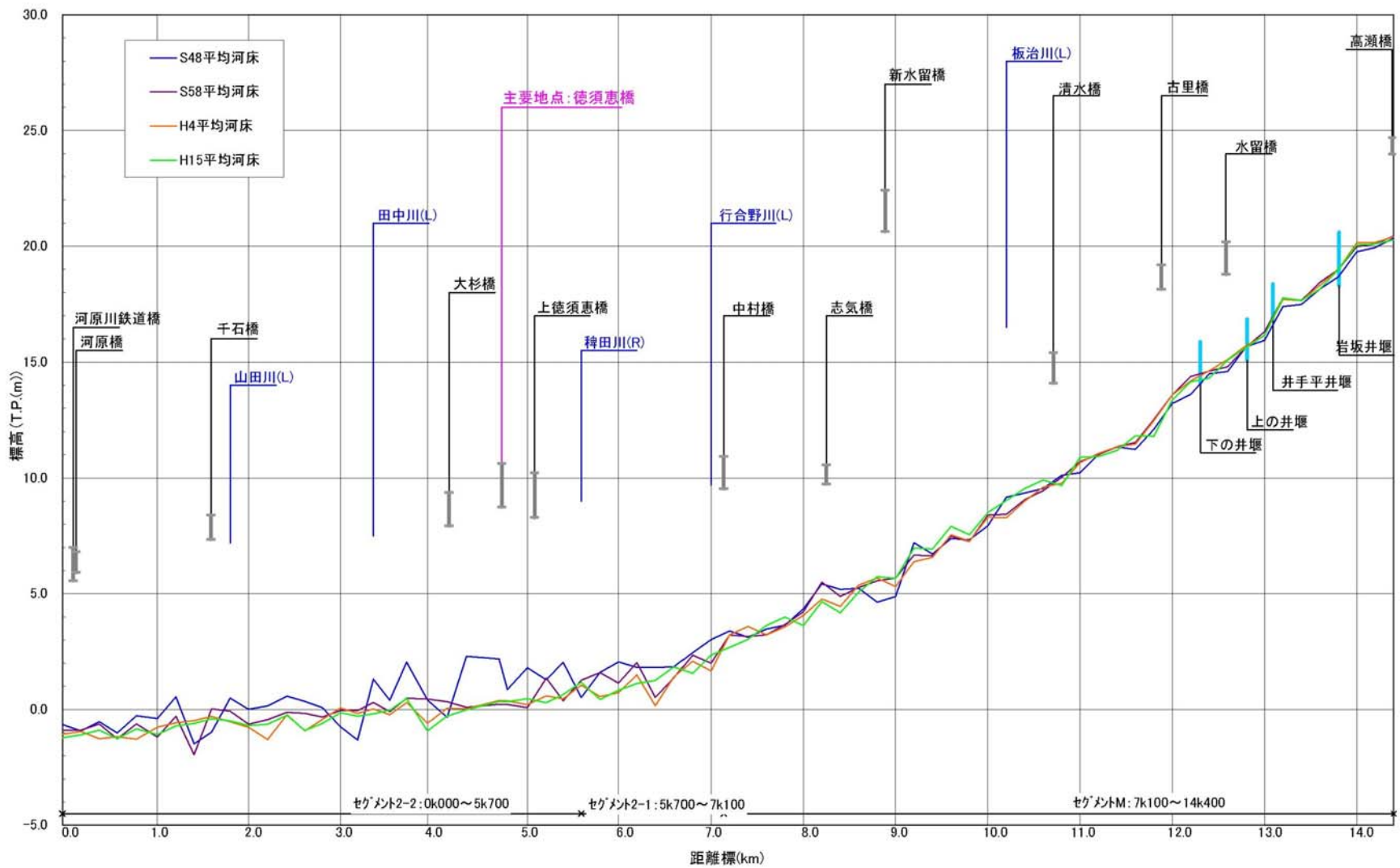


図 2 - 2 徳須恵川平均河床高縦断面図

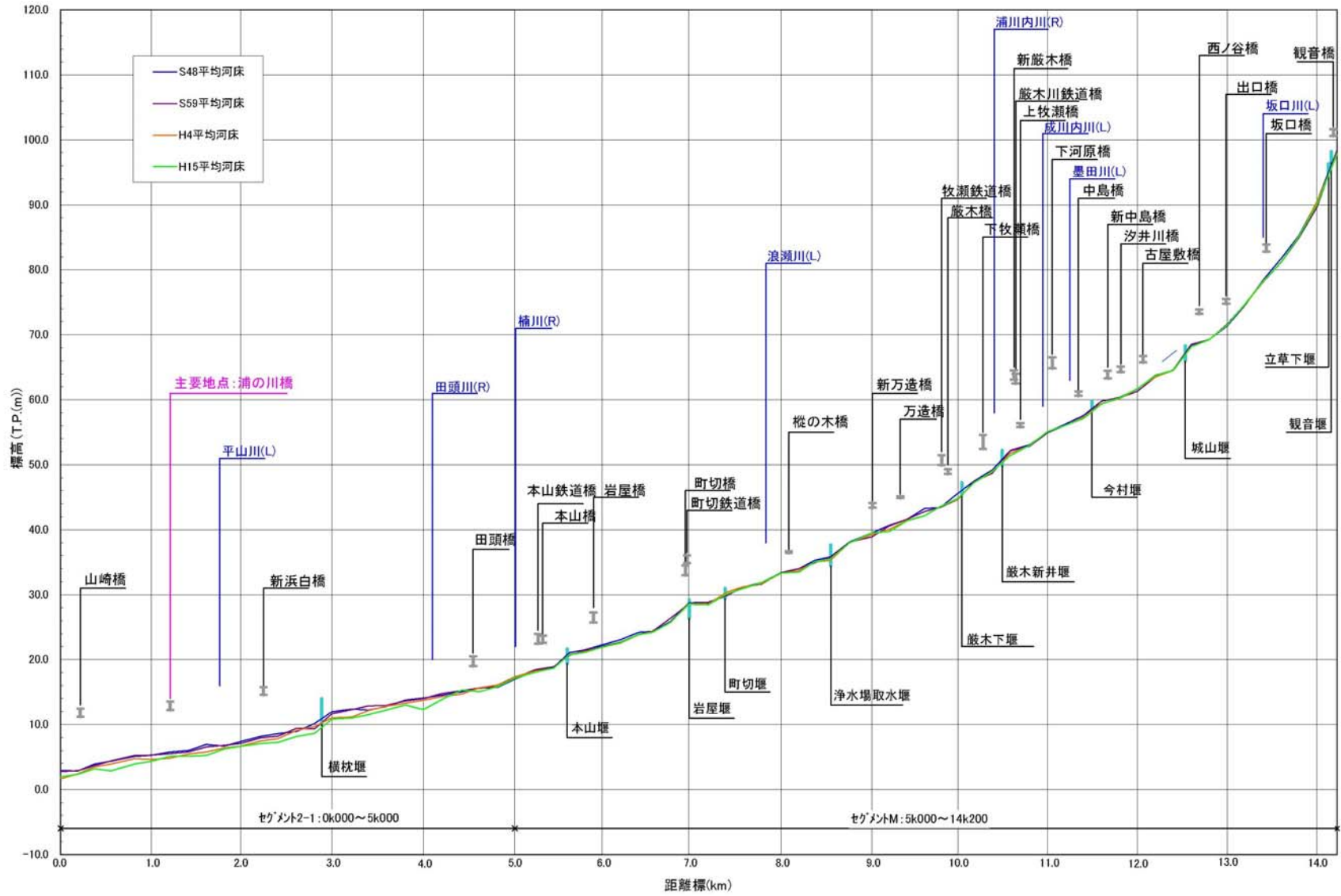


図 2 - 3 巖木川平均河床高縦断面図

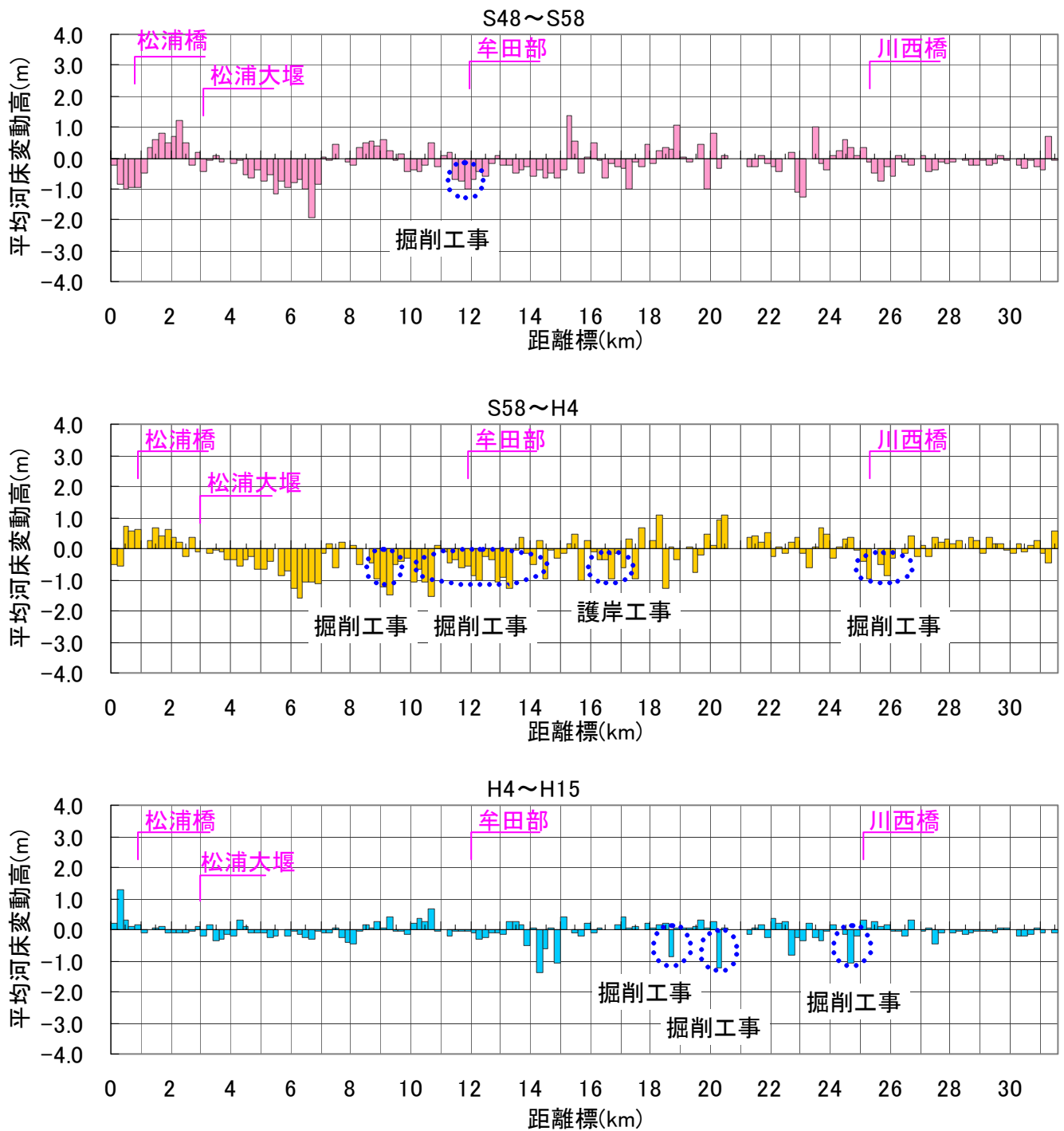


図 2 - 4 松浦川河床変動高の経年変化

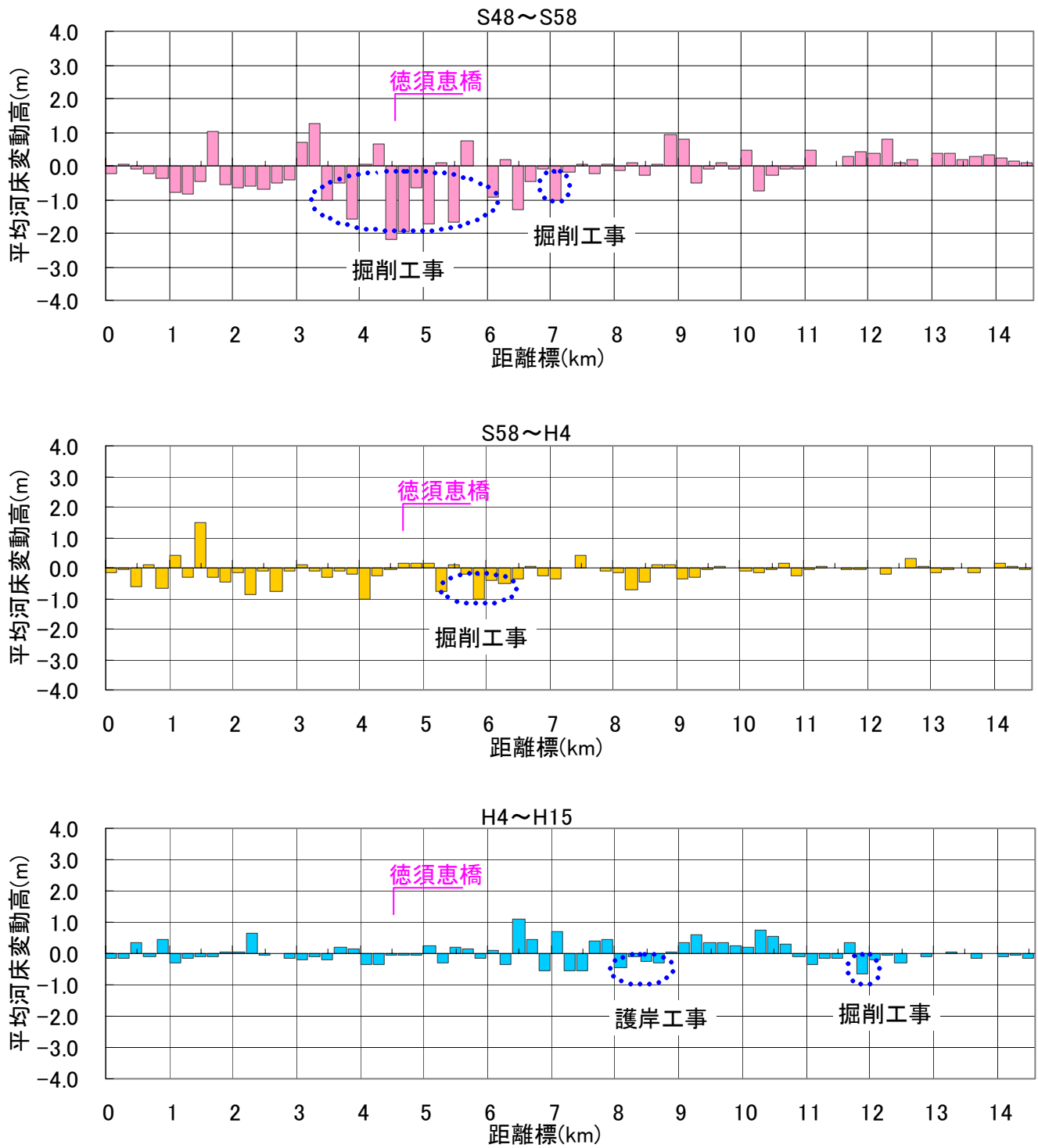


図2 - 5 徳須恵川河床変動高の経年変化

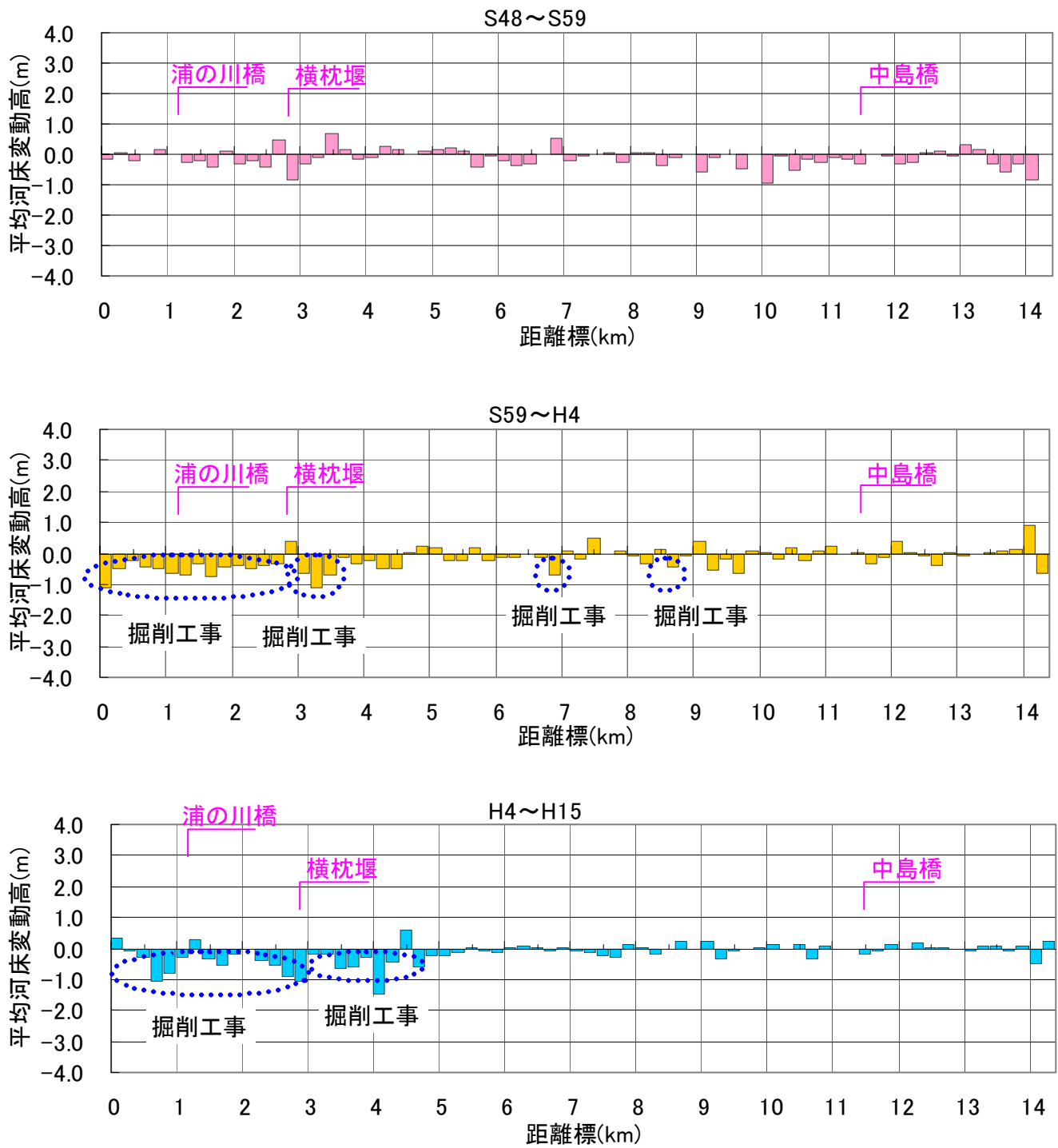


図 2 - 6 巖木川河床変動高の経年変化

2 - 2 横断形状変化

横断形状は、昭和 48 年から平成 4 年にかけて河床低下が見られる。これは、昭和 57 年、平成 2 年洪水等の影響によるものと考えられる。その後、近年の 10 年間（平成 4 年～平成 15 年）においては、部分的に侵食・堆積が見られるが、顕著な変動傾向は見られない。

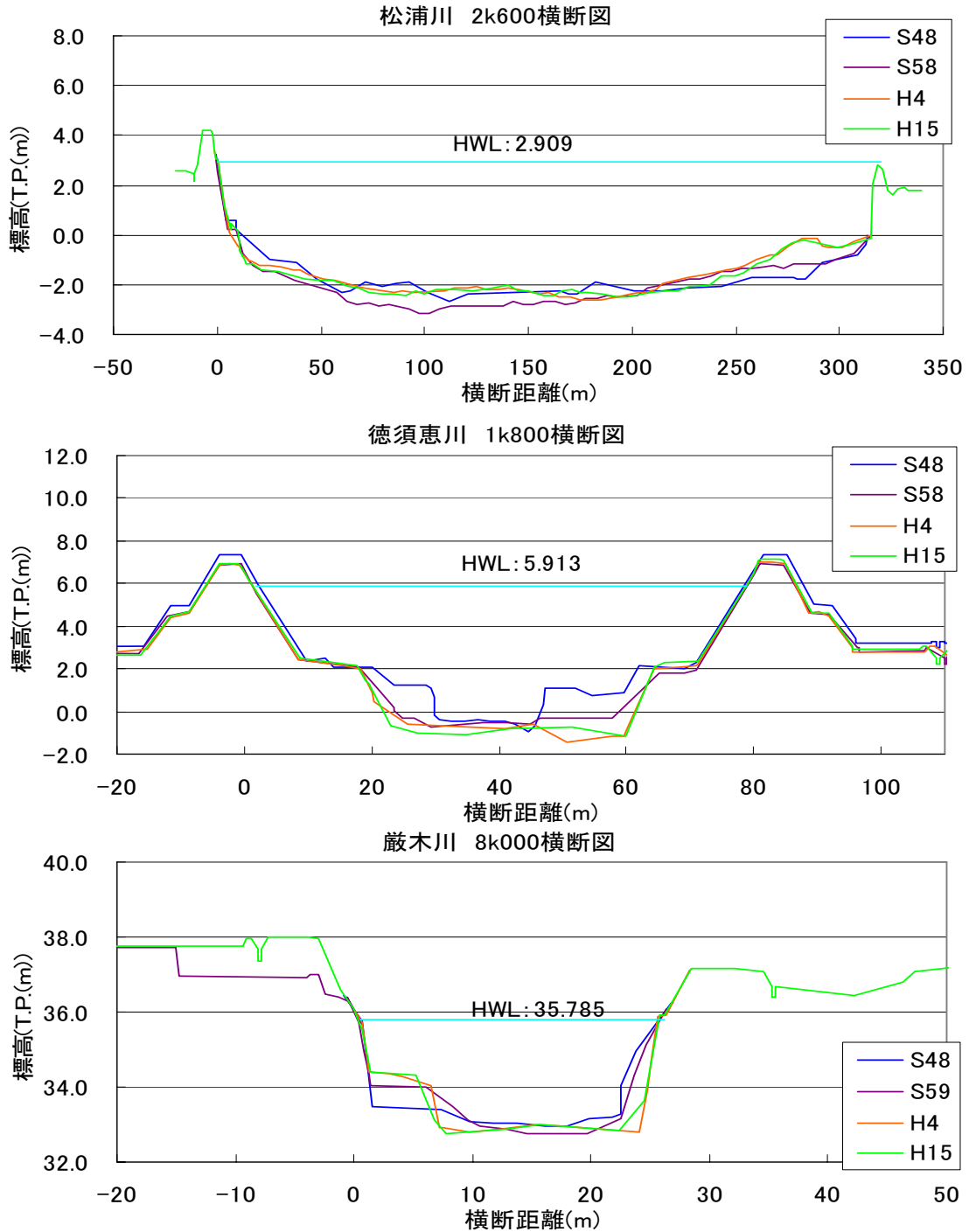


図 2 - 7 代表横断面図（松浦川 2k600、徳須恵川 1k800、巖木川 8k000）

3 . 河口部の状況

昭和 48 年から平成 4 年にかけて河床低下が見られる。これは、昭和 57 年、平成 2 年洪水等の影響によるものと考えられる。その後、一部に侵食や堆積が見られるが、砂州の発達による河道閉塞は生じていない。

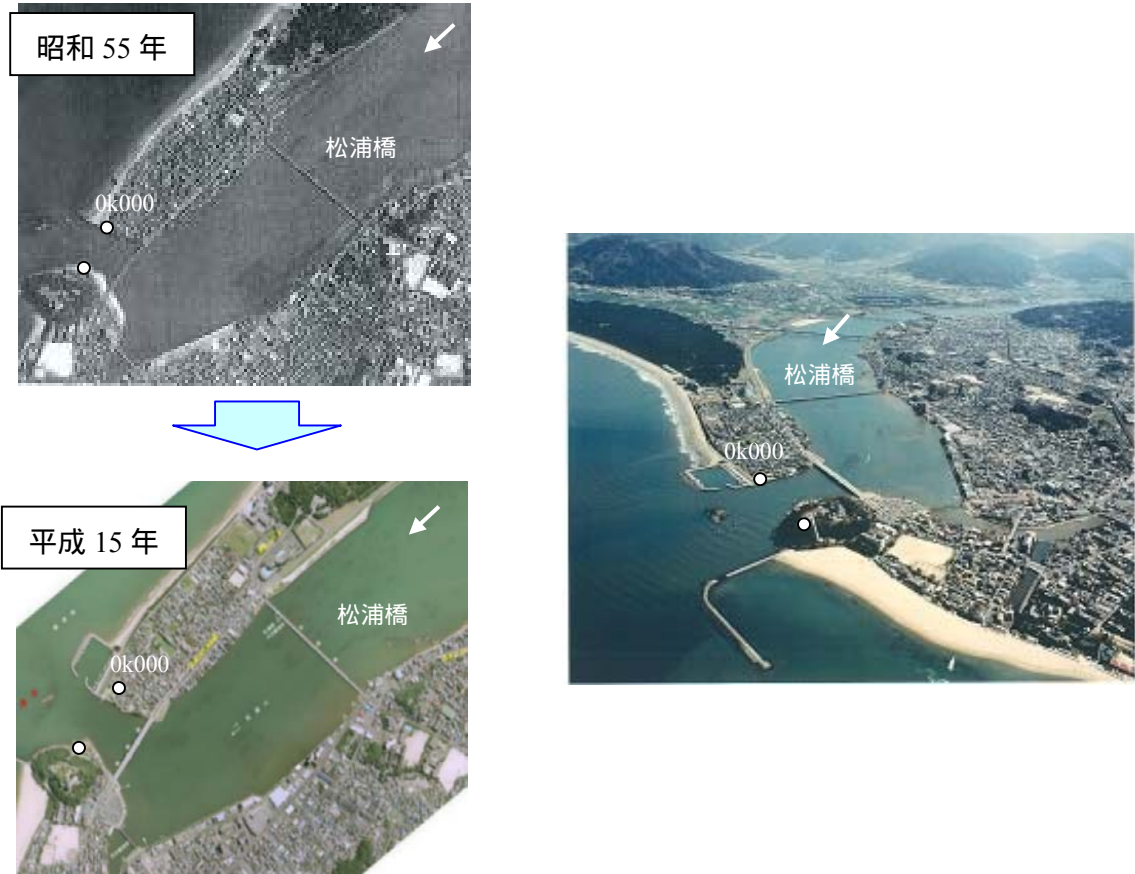


図 3 - 1 河口部の変遷

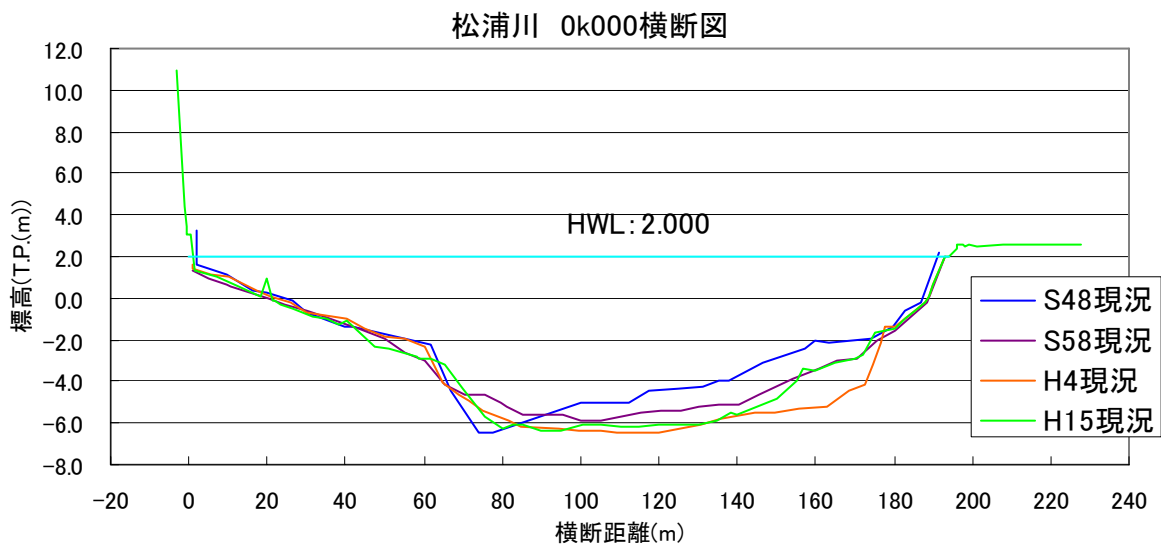


図 3 - 2 河口部横断変遷図

4 . ま と め

近年の約 30 年間の河床の縦横断形状や侵食・堆積土砂量の経年変化及び河口部の状況を検討した結果、昭和 48 年～平成 4 年の間においては、昭和 57 年洪水、平成 2 年洪水等により河床が低下したが、その後の河床変動量は小さいことから、土砂動態は安定しているといえる。

現況河道を基本とした河道計画により、今後とも水系全体の土砂のバランスを維持するよう努める。